

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月20日現在

機関番号：84602

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720289

研究課題名（和文） 国家形成・成立期の金属器からみた東アジア交流の基礎的研究

研究課題名（英文） Basic study of East Asian exchanges by metal remains during the formation of ancient nation in Japan.

研究代表者 持田 大輔 (Daisuke MOCHIDA)  
奈良県立橿原考古学研究所・調査部・研究員

研究者番号：70409605

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本列島出土の朝鮮半島・中国系の金属器—とくに装飾付大刀・銅鏡・銅鏡の変遷について整理し、それら遺物が受容される過程について検討した。結果、各時期の東アジア国際情勢を反映しながら威儀具的性格を有する金属器が日本列島で製作され、古代国家成立過程においてとりこまれていく過程の一端が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I researched the metal artifacts related with China and Korea that were bronze bowls and bronze mirrors and the swords decorated with gold and silver in Japan. And I considered the process of acceptance in ancient states Japan. I found out these metal artifacts with the character of dignity made in Japan, and the accepting process of these artifacts during the formation of ancient nation while reflecting the East Asia international situation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
H21（2009）年度	1,100,000	330,000	1,430,000
H22（2010）年度	1,000,000	300,000	1,300,000
H23（2011）年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：日本考古学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、6世紀から8世紀の期間における金属器の検討により、国家形成期の日本列島を古代東アジア交流のなかに位置付けようとする試みである。古墳～飛鳥・奈良時代の各研究では広く東アジア交流の中で捉える試みが多く見られており、古墳時代から飛鳥・奈良時代にあたる6～8世紀を国家形成・成立期として一連の流れで捉えることが適当であろう。

古墳時代研究では、装飾馬具や甲冑研究の分野で製作技術論の検討を経て、現在では朝鮮半島や中国大陸まで見据えた研究が主流となり、東アジア世界の中で古墳時代を捉える試みが大きな成果を上げている。同様に金・銀・金銅製品など金属製品の伝来や変遷、列島各地への分散など、その意味づけを検討することにより、文献では伝わっていない歴史的事象をうかがうことが可能となる。

## 2. 研究の目的

本研究では、6世紀～7、8世紀の東アジア交流を探るための基礎的研究が必要な資料として装飾付大刀、銅鏡、銅鏡を扱った。対象とする資料研究の目的と現状の課題は以下のとおりである。

### ①装飾付大刀の受容過程

6世紀後半から7世紀初頭にかけて、日本列島内の有力首長墓から金銀金銅で装飾された大刀「装飾付大刀」が副葬される。各種の装飾付大刀のなかでも朝鮮半島でも出土し、また環頭意匠の比較検討が容易な龍鳳文環頭大刀について扱う。6世紀後半に多く副葬される龍鳳文環頭大刀のうち、先行する単龍鳳環頭大刀の受容過程を追うことにより、いつ、どの段階で日本列島にもたらされ、そして製作されたかについて検討する。環頭大刀が畿内王権による一括生産・配布を想定した場合、その時期の見極めは重要な意味を持つ。また、朝鮮半島製品との意匠や製作技術の比較検討を行うことにより、舶来品か国産品か、また朝鮮三国のどの地域の影響を受けているかなど、系譜関係を把握し、6世紀後半の東アジア情勢との関連性についても明らかにすることを目的とする。

### ②銅鏡

装飾付大刀副葬の空白期にあたる7世紀において各地の古墳から、仏教系遺物とされる銅鏡の出土がみられる。その出土のあり方は、装飾付大刀の状況と近い。岡山県の津山盆地では、殿田1号墳と荒神西古墳から銅鏡が出土しているが、これらは鉛同位体分析により、朝鮮製と日本製であることが判明している。狭い地域において舶載・国産の銅鏡の区別に価値があったのか、またその銅鏡の価値とは何であるか検討する必要がある。

### ③唐大刀・唐様大刀

6世紀から7世紀前半にかけて副葬される古墳時代の装飾付大刀は、それ以降には副葬品としてみられなくなる。これは、装飾付大刀の性格の変化や古墳の薄葬化など様々な要因が考えられる。その後、同様の金銀装の拵えを有する刀剣が副葬されるのは、7世紀末～8世紀前半以降である。これらは、正倉院に伝来する刀剣と同様、唐大刀・唐様大刀と呼ばれる中国系の大刀であった。古墳時代の朝鮮半島系大刀

から中国系大刀への変化は、当時の国際情勢を反映するとともに、律令制の導入など中華帝国を模した「国家」を形づくるなかで、各種儀礼や服制の整備などと密接な関わりをもつと考えられる。その意味で、唐大刀・唐様大刀が律令期の儀刀として成立していく過程を検討する必要がある。

### ④隋唐鏡

中国において、海獣葡萄鏡と唐大刀が共伴し、紀年銘墓誌から絶対年代を押さえられる事例がみられる。奈良県明日香村高松塚古墳でも唐大刀とともに海獣葡萄鏡が出土しており、同古墳の位置づけを探るためにも、海獣葡萄鏡を含めた隋唐鏡の編年研究を行う必要がある。また、6世紀末から8世紀初頭まで、日本列島において隋唐鏡はほとんど出土していない。これは当時の東アジアの国際情勢を反映していると考えられるが、その年代的位置づけを考えるためにも、隋唐鏡の基礎的な編年研究が求められている。

## 3. 研究の方法

### ①装飾付大刀

朝鮮半島から日本列島への受容過程、系譜について検討するため、国内外で資料調査を実施した。大韓民国の嶺南大学校博物館、慶北大学校博物館、啓明大学校博物館、大伽耶博物館、国立金海博物館などを訪問し、展示資料を中心に資料観察を行った。

### ②銅鏡

関連文献の収集とともに、岡山県津山市殿田1号墳・同市荒神西古墳・岡山県真庭市定北古墳・広島県竹原市横大道8号墳・香川県高松市久本古墳、鳥取県黒本谷古墳の資料調査を実施した。同時に、蛍光X線分析、鉛同位体比分析を実施した。

### ③唐大刀・唐様大刀

唐大刀・唐様大刀の大刀装具について、日本・中国・朝鮮・その他周辺地域などを含めた出土例の資料収集を行った。

### ④隋唐鏡

7世紀代の唐鏡としては唯一の紀年銘鏡である永徽元年(唐650年)銘方格四神鏡について、早稲田大学津八一記念博物館蔵鏡の調査を実施した。また同博物館所蔵鏡を中心に鏡の調査を行

い、中国隋唐墓出土の銅鏡を加えた分類・編年の基礎的作業を実施した。また、隋代の小型鏡や、神獸鏡以外の鏡、そして7世紀半ば以降、海獣葡萄鏡の成立までを視野に入れた編年の構築を目的として継続的に資料の収集や国内外での資料調査を実施した。これら収集した資料は電子化を進め、データベースの作成を行った。

#### 4. 研究成果

##### ① 装飾付大刀の受容過程

6世紀後半に出土する装飾付大刀の代表例として龍鳳文環頭大刀がある。これらは、その意匠形態から中国・朝鮮半島の製品、またはその系譜を継ぐものとされてきた。とくに、百済武寧王陵出土単竜環頭大刀の存在により、日本出土の龍鳳文環頭大刀の源流は百済にあると考えられてきた。

日本出土の単龍・単鳳環頭の意匠を整理したところ、武寧王陵例や大阪府海北塚古墳例、岡山県岩田14号墳などにみられる、口に雲気または芝草を意匠した環頭ではなく、福岡県日拝塚古墳を祖形とする玉を啜えた「含玉系単龍鳳環頭」が主流となる。慶應義塾大学K224例や茨城県金岡八竜神例などを経て、やがて玉を省略した嘴を表現する栃木県益子天王塚古墳例や奈良県龍王山C3号墳例などへと続いていく。

これら「含玉系単龍鳳環頭」は朝鮮半島での類例を求めると、伽耶地域を中心に出土する。これらは百済製とする意見もあるが、伽耶で製作されたものと考えており、日本列島出土の単龍鳳環頭大刀の製作にあたっては、武寧王陵例に代表される百済地域ではなく、伽耶地域の影響も強く受けていると推定される。

ただし日本列島で含玉系環頭が製作・副葬される6世紀後半には、伽耶・新羅地域では装飾大刀自体の製作・副葬が確認されない。これは6世紀前半から半ばにかけての百済・新羅・伽耶地域の流動的な国際情勢を反映していると考えられる。伽耶地域で見られた装飾付大刀の需要が下がった点、あらたに新羅系の装飾馬具による身分表示が進んだ点などが指摘できる。

日本列島で出土する単龍鳳環頭は、初期のものは武寧王陵例と類似する雲気・芝草表現の環頭が多いが、中途から含玉系環頭とそれに後続する環頭に転換する。倭王権による列島各地の有

力首長の掌握手段として、単龍鳳環頭大刀による身分表示が進められたと推定される。それには単龍鳳文環頭大刀の国産化が前提となるが、朝鮮半島の装飾大刀製作の減少や、金官伽耶・大伽耶の滅亡などの情勢を背景として、当該地の大刀製作に関わった技術者の一部が日本列島へ移動し、単龍鳳文環頭大刀の国産化に関わったと考えたい。

##### ② 銅鏡の列島内製作への過程

6世紀後半から7世紀にかけ、装飾付大刀とともに、有力首長墓において銅鏡が出土する例が見られるようになる。その後、装飾付大刀の副葬が減少していく7世紀前半以降も銅鏡は副葬され続ける。以上の現象から、装飾付大刀と銅鏡所有者とは重複すると仮定し、この銅鏡の日本列島における受容過程について検討を行うことにした。

銅鏡の分類、編年についてはすでに先学の研究があるが、装飾付大刀と同様に国産化されることに意義があると考えられる。

岡山県津山市殿田1号墳から出土している銅鏡は、2007年に行った発掘調査と出土遺物の分析を通して、6世紀末という副葬年代の確定ができた。殿田銅鏡は津山市荒神西古墳出土銅鏡とともに、すでに鉛同位体比分析が行われており、6世紀末の殿田銅鏡には朝鮮半島産の素材が使用されたのに対して、7世紀半ばの荒神西銅鏡には日本列島産の素材が使用される可能性が高まった。また、出土墳の位置づけが、装飾付大刀を副葬する地域の有力首長に限定するものではなく、地方においては畿内と異なる様相を示すことが推定できる。

その後、広島県竹原市横大道8号墳、岡山県真庭市定北古墳、鳥取県智頭町黒本谷古墳、香川県高松市久本古墳の各古墳出土銅鏡の資料を追加し、鉛同位体比分析に加えて金属成分比の蛍光X線分析を実施した。その結果、朝鮮半島産の鉛を含む銅鏡の一群（殿田・黒本谷・定北・久本）は、銅・錫・鉛系の合金で製作されているのに対して、日本列島産の鉛を含む一群（荒神西・横大道）は銅・鉛合金で、錫わずかであった。正倉院伝来の新羅産とされる銅鏡（佐波理）は銅錫比が8:2の合金とされている。前者の一群は鉛を2割程度含むが、銅錫比は8:2に近い。朝鮮半島産鉛を含むこれらは、半島で

製作、または半島出身の工人らが製作に携わった可能性が指摘できる。また、6～7世紀代には銅錫だけでなく鉛が添加されていた可能性がある。

一方、後者の一群は錫が極めて少なく、銅鉛合金といってもよい素材である。これは錫原料が入手難だった点や、合金の配分に関する専門的知識の欠如という点が指摘でき、その鉛同位対比が日本産を示すことと整合性をもつといえる。

日本産鉛を含む銅鏡は出土古墳の分析から7世紀半ばには出現していると考えられる。中央・地方ともに政治的モニュメントが古墳から寺院へ転換する時期にあたり、寺院造営に伴う仏像・荘厳具等の製作と合わせて製作、流通した製品と考えられる。この点については、出土古墳の個別分析などを加えて、さらに整理・分析が必要である。

### ③唐大刀・唐様大刀の受容

奈良県高松塚古墳、マルコ山古墳で大刀が出土しているが、これらは残された山形金といった佩用装具などの類似から、正倉院に伝来する唐大刀に類似した大刀と考えられる。

6世紀～7世紀初頭は朝鮮半島系の装飾付大刀が有力者層に佩用されたが、7世紀末～8世紀にかけて、中国系の大刀に転換すると考えられる。そこで、その変遷を探るために、日本での出土例や正倉院伝来刀、さらに中国での類似の収集・分析を行った。

正倉院では、山形金を佩用装具として装着する大刀が複数存在する。装飾の程度は異なるが、山形金のみ単体で用いるものと、双脚足金物と一体化したものにおおむね二分できる。

前者は北倉金銀鈿荘唐大刀に代表され、鮫皮柄や心葉形の柄頭、鞘尾装具を装着するなど、高松塚古墳の形に最も近い。覆輪がつく二段の山形金を採用する。中国西安姚无陂墓では697年の墓誌とともに、高松塚古墳と類似した山形金が出土している。また、北朝期の大刀に用いられる山形金の形態は二段で、構造的にも類似する。高松塚や北倉金銀鈿荘から大刀などは中国製かそれに極めて類似し、7世紀末から8世紀初頭の製品である可能性が高い。

後者は、正倉院ほか、出土遺物も多く見られる。いわゆる方頭や立鼓形とよばれる柄頭をそなえた、7世紀代以

来の伝統的なプロポーションの大刀である。特に山形金と一体化している双脚足金物は7世紀後半の方頭大刀に起源を求めることができ、日本の伝統的な大刀に唐風の要素が加わって成立した大刀と考えられる。山形金は覆輪のないものが多く、また山形の形状は三段である。東大寺須弥壇下からの銀装大刀にも用いられていることから、前者の山形足金物に後出し、また8世紀半ばには既に成立していたとみられる。

結果として、7世紀末から8世紀初頭にかけて山形足金物を採用した唐大刀は日本へ伝来し、8世紀前半に在来の日本刀と融合するかたちで「唐様大刀」が成立したと考えられる。その背景として、7世紀後半、天武持統朝期から進められてきた「国家」の形制が、8世紀初頭の律令の導入により完成へ向かっていったことが挙げられる。諸儀礼の整備にともなって服制改革が複数回なされている。なかなか定着しなかったとされるが、8世紀前半にはほぼ朝服・礼服が確定されている。

養老2年(718)に帰朝した多治比真人県守の遣唐使の一団は翌正月の朝賀に唐服を着用していたという。その後、二月には天下百姓に右襟を求め、そして笏の導入するなど衣服の改革が行われている。これは唐様式に強く影響を受けたものとみられる。官人たちの佩用する大刀も同様に唐様式の拵えが採用される状況であったと考えられる。

### ④隋唐鏡の分類と編年

日本国内では、隋代・初唐期の鏡の出土はほとんど知られていない。数少ない例として、北朝ないし隋鏡と考えられている静岡県浜松市神田古墳の神獸鏡が知られているのみであり、後続する出土例は奈良県高松塚古墳などで出土する海獸葡萄鏡となる。6世紀後半から7世紀末までの期間に製作された中国鏡は出土しないことになる。そこで、隋唐鏡の変遷を整理し、その期間について検討するための基礎作業を行った。

隋代には北朝からの系譜を色濃く残す、連続弧線文鏡群とともに、外区に鋸齒文と十二支文帯を採用する十二支文鏡が流行する。出土墓の年代から、6世紀末から7世紀初頭にあたる。こののち、漢代画像鏡を模倣した銘帯鏡群が出現するが、その年代はおおむね7

世紀第二四半期以降と考えられる。この鏡群は、鏡に表現された地文の文様や断面形態の変化から、さらに分類が可能である。雲文、唐草文などを主体とする鏡群、忍冬・パルメット文や蓮華文を主体とする鏡群である。

前者の鏡群を隋鏡、後者の鏡群を初唐鏡と呼称しても差し支えないと考える。したがって隋代と初唐期の鏡は明確に分類でき、隋鏡2期、初唐期2期（6世紀末から7世紀半ばまで）の4時期に区分が可能である。7世紀半ば以降、海獣葡萄鏡の成立と変遷の過程については、現在整理中である。紀年銘墓などの検討により、一定の年代を押さえることが可能と考えている。初唐鏡群から海獣葡萄鏡への変遷について、年代の整合性などの問題があり、今後の検討課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1. 澤田秀実・持田大輔・白石純「津山油木北 殿田1号墳の研究」2009.12『くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要』第42巻第2号
2. 持田大輔「隋代・初唐期における銅鏡の分類と編年」2010.3『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』、早稲田大学會津八一記念博物館、第11号
3. 持田大輔「古墳時代後期・終末期の装飾付環頭大刀」2011.6『月刊考古学ジャーナル』ニューサイエンス社、7月号

〔学会発表〕（計3件）

1. 持田大輔・長柄毅一・澤田秀実「6～7世紀における青銅容器の生産体制（予察）」2010.8.27（アジア鑄造技術史学会出雲大会 島根県立古代出雲歴史博物館）
2. 澤田秀実・齋藤努・長柄毅一・持田大輔「6～7世紀における出土銅鏡の理化学的研究」2011.8.27（アジア鑄造技術史学会樫原大会 奈良県立樫原考古学研究所）
3. 持田大輔「6～7世紀の銅製品生産について — 古墳出土銅鏡を中心に —」、2011.10.1（文化財の解析と保存への新しいアプローチⅧ、早稲田大学奈良美術研究所、早稲田大学小野記念講堂）

〔図書〕（計1件）

持田大輔「含玉系単龍鳳環頭大刀の検討—日本列島および朝鮮半島出土例より—」『比較考古学の新地平』、同成社、2010.2

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

持田大輔（奈良県立樫原考古学研究所・調査部・研究員）

研究者番号：70409605

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし